

アートマネージャー・メンターシッププログラム

バッテリー 第1期 活動ドキュメント



バッテリー
Battery

本「バッテリー 第1期 活動ドキュメント」は、バッテリーでの1年間の活動を、主に「メンタリングトピック」のご紹介を中心に、中間報告会での「ディスカッション」の一部や、各「イベントレポート」をとおして記録したものです。

事業のドキュメントにとどまらず、バッテリーをとおした舞台芸術業界の知見、経験のアーカイブとして、多くの方にご活用いただける冊子になりました。ぜひご一読ください。

WHAT IS BATTERY?

バッテリーとは？	03
メンティー⇄メンターのバッテリー	04
メンターシッププログラムとしてのバッテリーの特徴	06

MENTORING TOPIC

メンタリングトピック

「お金・制度」編	08
「クリエイション」編	10
「生活」編	12

DISCUSSION

ディスカッション

ハラスメントにガイドラインは必要か？	13
--------------------------	----

EVENT REPORT

イベントレポート

中間報告会/ラストピッチ	14
公開レクチャー	15

ROUNDTABLE

ラストピッチ座談会	17
-----------------	----

COLUMN

メンターコラム	18
---------------	----

SCHEDULE

年間スケジュール	19
----------------	----

WHAT IS

バッテリーとは？

Explatとベンチは、舞台芸術分野の制作者（アートマネージャー・プロデューサー・コーディネーターなど）のうち、劇団・ダンスカンパニーなどの制作者およびフリーランス（組織との雇用関係がない）として活動している方にフォーカスしたメンターシッププログラム「バッテリー」を、2022年1月から12月にかけて約1年間にわたり実施しました。

舞台芸術業界において、作品創造の母体となる劇団やダンスカンパニーなどの役割は非常に重要であり、アーティストがアーティストとしての創造的な活動に注力するためにも、その活動を支える制作者の存在は欠かせません。いわば舞台芸術を社会に送り出す豊かな源泉、土壌を自由につくり出し、芸術的、社会的な価値を生み出す存在とも言えます。

しかし一方で、劇団・ダンスカンパニーやフリーランスの制作者たちは、何か問題が起きた際、解決のために気軽に相談したり、具体的にサポートを求められる相手がすぐ近くにいない、そもそも誰に相談すればいいかわからないなどの課題があり、これは個人の力のみで解決し得るものではありません。

Explatとベンチでは、このような舞台制作者をつなぐ直接的な支え合いのネットワークを構築することが、次代の新たな舞台芸術を生み出す一助になると考え、このメンターシッププログラム「バッテリー」を実施しました。

バッテリー【battery】とは、野球で投手と捕手のコンビのことを指します。また充電・蓄電の意味もあり、このプログラムを通じて、メンターと参加する舞台制作者同士のネットワークを構築し、次代を担う制作者たちが自身の活動のための力を蓄えてほしいという意味が込められています。参加者が現在向き合っている／活動しているフィールドそのものを育成の場とし、メンターチームがもつ経験とネットワークによって支えることで、人が育ち、持続可能な活動と未来への活力へとつなげるプログラムです。

舞台芸術分野の制作者にフォーカスした
メンターシッププログラム

制作者をつなぐ直接的な支え合いの
ネットワーク

BATTERY?

メンティー⇄メンターのバッテリー

Mentee

3年以上の舞台制作者としての経験をもつ、20歳～35歳のメンバー。フェスティバルやプロダクションの制作に関わるフリーランス、劇団に所属する制作者、責任者、演出家兼プロデューサーなど、多様な立場のメンティーが、公募と選考を経て集いました。

Mentor

豊富な経験をもつ舞台制作者。Explatとベンチのメンバーが中心となって務めます。メンティー1名に対して、応募時の希望や選考時の情報などをふまえて2名以上のメンターをマッチング。日々連絡を取り合い、メンティーの日常的な活動に対するアドバイスなど、適切なサポートを行いました。

バッテリー 01

新垣七奈 活動拠点:沖縄県



Mentee

1996年沖縄生まれ。2016年に「演劇ユニット多々ら」を立ち上げ、ユニットで主催する全作品の演出、制作を行っている。コンセプトや特徴の違う企画を行い多方面から創作を探索中。

藤原顕太 特定非営利活動法人Explat/一般社団法人ベンチ



Mentor

守備範囲 福祉 法人設立 ネットワーク コーディネーター
人育成

1980年神奈川県生まれ。舞台芸術制作者、社会福祉士。2006～16年有限会社ネビュラエクストラサポート(現・株式会社ネビュラエンタープライズ)にて宣伝代行や制作者の人育成など、舞台制作の支援に関する様々な仕事をした後、2017年から福祉と舞台芸術に関わる活動を始め。NPO法人舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)理事、NPO法人Explat副理事長、公益財団法人びわ湖芸術文化財団 文化芸術による共生社会づくりコーディネーター。

武田知也 一般社団法人ベンチ



Mentor

守備範囲 プロデュース/公立劇場/フェスティバル/
地域/子ども/ファンドレイズ

1983年横浜市生まれ。にしがも創造舎、フェスティバル/トーキョーを経て、2014年冬～ロームシアター京都開設準備室に所属、同劇場で事業・企画を担当。2018年4月～はフリーランスになり「さいたま国際芸術祭2020」キュレーターなどを務める。舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM) 副理事長、埼玉県川越市にてまちづくり・場づくりを手掛ける合同会社オンドメンバー。玉川大学芸術学部演劇・舞踊学科、法政大学キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科非常勤講師。

バッテリー 02

牛島 青 活動拠点:高知県、石川県



Mentee

神奈川県出身。高知県須崎市子供のためのデジタルものづくり施設「てくテックすさぎ」館長。まつもと市民芸術館企画・制作職員の勤務を経て、21年退職。同年松本市にて演劇的フェスティバル「FESTA松本2021」の立ち上げに関与。学生時代に立ち上げた能登半島での演劇滞在制作企画「ノゲキ」をライフワークとして、二足のわらじで活動中。「スウェーデンに移住すること」が次の目標。

武田知也 一般社団法人ベンチ

守備範囲 プロデュース/公立劇場/フェスティバル
地域/子ども/ファンドレイズ

藤井さゆり 一般社団法人ベンチ



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 フェスティバル コーディネーター
多分野協働 アートプロジェクト 海外招聘

1985年神奈川県生まれ。アートコーディネーター、プロデューサー。日本大学大学院理工学研究所博士前期課程建築学修了。2011年よりフェスティバル/トーキョーにて、都市空間で展開する演劇プロジェクト等のマネジメントを担当。2014年からはフリーランスとして日本各地のアートプロジェクト、パフォーミングアーツフェスティバル等のコーディネーター、若手育成事業の企画制作等を行う。2016年より NPO 法人芸術公社メンバー。玉川大学芸術学部演劇・舞踊学科非常勤講師。豊岡演劇祭プロデューサー。

バッテリー 03

金井美希 活動拠点: 東京都



Mentee

Photo: manami tanaka

1994年東京都生まれ。京都造形芸術大学舞台芸術学科卒業。商業演劇の宣伝会社に就職するも、舞台クリエーションのもっと近くで仕事がしたいと思い退社。2018年7月からフリーランスの制作として本格的に舞台芸術に携わる。最近ではダンス公演や劇場以外でのパフォーマンス作品に携わる機会が多い。今後は演劇公演にも積極的に参加し、マルチな制作を目指している。「今を楽しく、生涯現役」がモットー。

藤井さゆり 一般社団法人ベンチ

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 フェスティバル コーディネート
多分野協働 アートプロジェクト 海外招聘



小森あや 一般社団法人ベンチ



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 / コーディネート
多分野協働 / アートプロジェクト / 野外劇

北海道生まれ。武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業後、アートユニット「明和電機」に在籍。その後、フェスティバル/トーキョーや京都の劇団、TASKO inc.を経て、一般社団法人ベンチに参加。パフォーミングアーツを中心に、観客と作品をつなぐ空間と制作環境をつくり続けている。近年の参加作品に、佐々木文美『セレモニー』(2022)、小尻健太+森永泰弘『ころり』(2022)、『未練の幽霊と怪物-「挫波」「敦賀」-』(2021)、『サンガツ@WWW』(2019)、小泉明郎『縛られたプロメテウス』(2019)、サエボグ『House of L』(2019)がある。

バッテリー 04

河野 遥 活動拠点: 東京都



Mentee

Photo: comuramai

1996年生まれ。埼玉県立芸術総合高等学校音楽科ピアノ専攻、国立音楽大学音楽情報専修卒。在学時より、学内外でアートマネジメントや文化政策を学ぶ。あうるすぽっとインターンシップ研修、座・高円寺劇場創造アカデミー講義のみコースなどに参加し、2018年よりストミックに所属。所属団体のほか、小劇場を活動拠点とする若手の劇団・ユニット等の公演制作も兼任する。

清水 翼 一般社団法人ベンチ / 株式会社カンカラ社



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 劇団運営・経営 野外劇
海外公演・ツアー 関西

1981年宮城県塩竈市生まれ。主に舞台芸術の制作者。京都橘大学文化政策学研究科博士前期課程修了。2007年から2017年まで、大阪を拠点に野外公演を行ってきた劇団維新派に制作として所属する。劇団の解散後は、維新派に関するアーカイブ活動を継続しながら、あいちトリエンナーレやKYOTO EXPERIMENTに携わる。関西を拠点に舞台芸術のマネジメントを行う、株式会社カンカラ社を運営。

小森あや 一般社団法人ベンチ

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 コーディネート
多分野協働 アートプロジェクト 野外劇

バッテリー 05

柴田 聡子 活動拠点:
東京を中心に神戸、京都など関西でも活動



Mentee

1992年埼玉県生まれ。多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒。大学卒業後、インターンとして舞台芸術の現場に関わる。2017年よりPARC - 国際舞台芸術交流センター職員として国際プラットフォーム事業や公演制作などに従事。2021年春に同センターを退職し、フリーランスのアートマネージャーとして活動を開始する。現在は演劇・ダンスなどのクリエーションの現場や、中間支援団体での助成事業等にも携わる。2018年より東京・水道橋のオルタナティブスペース「路地と人」の運営メンバー。

植松 侑子 特定非営利活動法人Explat



Mentor

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 / 組織経営 / 業務効率化 /
フェスティバル / 海外公演・ツアー / 新しい働き方

特定非営利活動法人Explat理事長 / 合同会社syuz'gen代表社員。お茶の水女子大学文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学コース卒業。在学中より複数のダンス公演に制作アシスタントとして参加。卒業後はダンスカンパニー制作、一般企業での勤務、2年間の海外放浪を経て、2008年~2011年フェスティバル/トーキョー制作。2012年からは1年間韓国・ソウルに留学。帰国後は主にフリーランスの制作として様々な劇場・組織・劇団と協働。モットーは、もう少し深く掘り下げよう&情報は惜しみなく共有しよう。

清水 翼 一般社団法人ベンチ / 株式会社カンカラ社

守備範囲 舞台芸術制作実務全般 劇団運営・経営 野外劇
海外公演・ツアー 関西

メンターシッププログラムとしての バッテリーの特徴



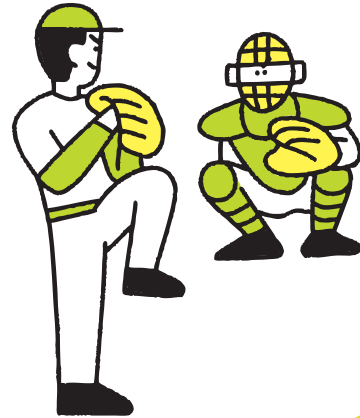
メンターは複数体制



普段の活動や仕事について
メンターに相談できる



充電・蓄電の意味もある
バッテリー



野球の投手と捕手の
コンビのような関係



メンティー同士の交流も



経験と知識の共有



**対話・意見交換の
プラットフォーム**



**メンティーは全国から参加
オンラインでつながるネットワーク**

「お金・制度」編

TOPIC 企画書をつくる／助成金に申請する

イメージの中にある企画を実現するためには、それを言葉にして伝える必要があります。実際に助成金への申請を検討していたメンティーからは、具体的な相談が寄せられました。メンタリングでは、1つの企画書の内容を何度もブラッシュアップしたことで、メンティー自身が企画の本質を、表層的ではなく自分の言葉で伝えられるようになりました。

Mentee

自主企画を立ち上げるにあたり、仲間を集めるときに必要な企画書を作成する必要があり、読みやすい企画書をつくることを目標にしたいと思っています。また、初めて助成金の申請にも挑戦します。特に予算書をどのように整えるべきかが難しく、申請の際に留意すべき点などはあるでしょうか？

Mentor

5W1Hなど、企画内容を整理するところから始めよう

👉 特に重要なのは「Why=なぜその企画／作品なのか」

クリエイションを実現するためには、作品を上演することの意義や必然性を、作り手側でも共有するとともに、協働するパートナーや観客へ伝えることが大切です。

具体的な文章をまとめていく際には、主語(主体)を明確にし、その主体が「自分の言葉」で語ることを意識するようにしましょう。

助成申請の段階では、助成金の「趣旨」を把握します。自身の企画内容を精査し、その趣旨に沿うポイントに力を入れた資料を準備することが重要です。また予算の策定時には、自分を含めたクリエイションメンバーのフィーの設定を検討してみましょう。客観的な視点から適切な額を考えるとともに、企画全体の内容に合わせた柔軟な調整をしていきます。

申請する助成金の種類によっては提出後に書類の修正が入ることもあります。完成度ではなく、スピード感を優先した方が良いケースがあることも、メンティーからは共有されました。

TOPIC 自分のフィーってどう決める？

製作母体も予算規模も、それぞれ多様な舞台芸術作品のプロダクションの現場。役割が多岐にわたる「制作者」という業務内容について、どのようにフィーの設定をしたらよいでしょうか。先輩であるメンターたちも、キャリアのなかで幾度となく直面してきた課題と言えます。メンティーからも「自分のフィーをどのように設定したらよいか」という相談が寄せられました。

Mentee

制作業務を初めて外部委託するカンパニーから仕事の依頼を受けた際に、いくらでお願いできますか？ と聞かれました。また、当初の想定とは異なる業務が追加で発生した際に、その業務に対するフィーが提示されないこともありました。全体予算も潤沢にあるわけではないと思われるプロダクションのなかで、自身のフィーをどのように決めて、カンパニーとコミュニケーションをとったらいいでしょうか？

Mentor

まずは見積りを作成してみよう！

👉 仕事を依頼してきた相手が何を求めている、自分には何ができるかを整理する

制作業務のなかには、現場にいなければならない稽古場づきや本番対応といった業務から、デスクワーク中心のマネジメント業務など、その内容も多岐にわたります。

現場での業務がある場合は、期間や時間で見積もることもできますが、そうではない場合には自身の経験値から金額設定をする必要があります。

プロダクションの規模感から、お互いに無理のない金額設定をすることも大切。プロダクション全体の予算感を想像できるようになることもひとつの方法です。そのなかで自身が担う役割に対する適正なフィーを考え提示するようにしてみましょう。

自身の業務には経験値合せてこれぐらいのフィーが妥当であるという見積りを作成し、それを擦り合わせていくコミュニケーションを怠らないことが何より大切です。

舞台芸術制作者・アートマネージャーとしての仕事や生活——。

バッテリーでは、メンティーたちからはどのような悩みが共有され、どのような事例が共有されたのか。

バッテリーでのメンタリングをとおして可視化された、若手舞台芸術制作者たちが直面する

アクチュアルなテーマの事例をご紹介します。

TOPIC 立替払いや、経費込の報酬って…

アーティスト・制作者ともにフリーランスであり、助成金による収入に頼るプロダクションや、劇場などからの作品を委嘱されるケースでは、創作の過程で拠出が必要となる経費を「いったん誰かが立て替える」ことになるケースが多々あります。

作品やプロジェクトの規模が大きくなれば、立替金額も巨額になってしまい、

長期のプロジェクトであれば立替期間も長くなり、生活に支障が出ることも。

舞台芸術業界における制度的な課題とも言え、多くの人が直面しているトピックです。

Mentee

作品のためには創作期間を長くとりたいのですが、経費の立替期間などを考えるとキャッシュフローの問題が大きくなってしまいます。また交通費込など、経費込での報酬の提示の場合、事前の想定よりも現場に多く行かなければならなくなった際に、報酬から経費が差し引かれてしまうことになる——。こういった問題にはどのような対策を講じていけばよいでしょうか？

Mentor

概算払いや途中清算などの具体策を
助成機関や劇場などに相談しよう

♡ 事前に資金を入れてもらえるかどうかを確認する

相手側の担当者が、フリーランスの立場を経験したことがない場合、立替払いの負担を想定することが難しく、自分たちの手続きの簡便さのほうが優先されることもあるかもしれません。まずは相手側に相談し、過去の事例を調べてもらうなど、働きかけてみるのが重要です。

経費込の報酬提示の場合は、相手が想定している内訳をまずは提示してもらいましょう。それを超える交通費や、予期せぬ費用が発生した場合に、報酬とは別の予算から出してもらえよう、交渉できるようにしておきましょう。

メンタリングを経たメンティーのなかには、個人への委託ではなく、組織対組織にできるよう、付き合いのあるNPOなどの創作母体にプロダクションの請け元になってもらう相談をするといった変化も見られました。

TOPIC “コロナ禍助成”は本当に役に立っているのか？

新型コロナウイルス感染拡大の状況下では、

舞台芸術の現場も公演の延期や中止などが相次ぎ、大きな打撃を受けました。

このような現状を受け、舞台芸術業界では複数の公的助成金や制度が発表され、

それらを活用した団体などからさまざまな反響がありました。

メンタリングでは、メンティーとメンターが同じ舞台芸術業界の制作者同士という立場で意見交換を行いました。

Mentee

コロナ禍に発表された公的助成や制度を活用した劇団などから、清算時期が大幅に長引いているといった声が挙がり、経済的に苦しい思いをしている人たちがたくさんいます。これらは本当に舞台芸術業界のための助成金／制度なのでしょうか？ 疑問を感じます。

Mentor

制度自体の不備を
適切な手段によって伝えよう

♡ 舞台芸術業界のネットワークを活用する

コロナ禍での創作をサポートするために立ち上がったはずの公的助成金や制度ですが、それらを活用した人たちの経済状況が逆に苦しくなっているという現状があります。

メンティーからは、制度そのものが見切り発車的に実施され、支払いの時期などの運用が適切に設計されていないのではないかと問題意識が挙がりました。

このような舞台芸術業界の諸問題に対して、現場側から意見を発信している組織として、ON-PAM(舞台芸術制作者オープンネットワーク)、芸団協(日本芸能実演家団体協議会)、劇場のことであれば公文協(全国公立文化施設協会)などの名前が挙がりました。

「クリエイション」編

TOPIC 制作者としてクリエイションに参加すること

稽古場や公演時の劇場といった現場対応から、票券・広報・財務などの実務的な仕事、そしてアーティストとともにクリエイションを支えるドラマツルグ的な役割——。「制作者」の職域は、可視化されにくいものであると同時に、多岐にわたります。ひとつのカンパニーに数年間、制作として携わってきたメンティーからは、制作者もクリエイションに参加したいという思いが共有されました。

Mentee

制作者は「雑用係」のイメージが強いです。ここ最近のことですが、私は自分のカンパニーのクリエイションに参加したいという気持ちが出てきました。観客のような視点から、稽古場でもフラットにコメントをしたり、劇団にフィードバックしたいと考えているのですが——。

Mentor

制作者としてクリエイションに関わる方法はケースバイケース
👉 いろんな形でトライしてみよう！

制作者の職能として、アーティストに伴走してクリエイションに参加するタイプ、実務に専念するタイプ、どちらにもそれぞれの面白さがあります。それは協働するアーティストによって変わることもあるし、制作者の志向にもよりますが、継続していくためにはカンパニーとの適切な距離感をもつ視点も大切であると、メンターからはフィードバックがありました。

また別のメンティーからは「アーティスト（演出家）に対して、いち制作者が意見を言いくいと感ずることはないか？」といった質問も出ました。

劇団のメンバーとして数年続けてきたことで、関係性が生まれ、最近になってやっと意見を言えるようになってきたと話すメンティー。劇団づくりの制作者ならではの実感を実感にすることで、これからの仕事のスタンスを考えるメンタリングになりました。

TOPIC 野外公演を実現する！

劇場やスタジオなどの施設に限らず、公共空間や屋外などで公演を行うケースも近年では多く見られるようになってきました。野外公演の企画に取り組んでいたメンティーからは、具体的な質問が寄せられました。野外公演をベースとしていたカンパニーでの制作経験をもつメンターや、フェスティバルなどで野外公演を実現したメンターもいて、それぞれの経験からアドバイスをを行いました。

Mentee

本格的な野外公演に初めて挑戦します。どのような準備や対策が必要でしょうか？ また想定しておくべき予算の費目や、行政が管理するエリアを使用する場合の手順や準備の具体的なプロセスも知りたいと思っています。

Mentor

大きな注意点は「テクニカル」と「運営」！
👉 機材や電気などのインフラ、導線の確認や警備など、事前の精査を

野外公演に取り組むにあたり、通常の屋内公演と予算的に大きく異なるのが、テクニカルな機材関係です。電気やテントなどのインフラも予算がかかるので、精査をすることが必要になってきます。

運営面においては、公演に際しての占有エリアを往來する一般の方と、観客、双方に混乱がないよう配慮することが大切。過去の公演・イベントの実績もリサーチしたうえで、対応を検討しましょう。特に舞台監督とは密に連絡を取り合い、導線や外からの見え方に関わる資材置き場など、施設側との交渉には協力に入ってもらうとスムーズに進むことがあります。夜間を含む警備については、警備会社への外注も有効です。

野外公演ではこういった運営面の状況を、クリエイションメンバーと密に共有し、お互いの現状認識のもとで進めていくことが大きなポイントになってきます。

TOPIC クリエーションの仲間づくり

作品の上演には、たくさんの人たちが関わっています。
アーティストとしてユニットを主宰し、そのプロデュースも兼ねているメンティーからは、外部から招くスタッフ・キャストに本来の力を発揮してもらうための環境づくりやケアのしかたに課題を感じているといった悩みが寄せられました。
そこでメンタリングでは、「仲間づくり」をテーマに据え考えていきました。

Mentee

クリエイションにおいては利益を求めていることもあり、ほかの人に協力してもらうことに自信がもてません。ほかの人を頼りにすること自体に苦手意識があり、スタッフやキャストの皆さんに逆に気をつかわせてしまうことも多くあります。どのように仲間づくりをしていったらよいのでしょうか？

Mentor

そもそもなぜ仲間が必要なのか？

- 👉 作品づくりに共同で責任をもってくれる人に出会おう

誰とどのようにクリエイションに取り組むか。メンバー＝仲間は、作品づくりにおいてもっとも重要な要素かもしれません。

仲間づくりの方法を模索していたメンティーですが、メンタリングではそもそもなぜ仲間が必要なのかを掘り下げて考えたことで、一緒に作品をつくってくれる人との出会いが必要だと分かり、出会いをつくるためのプロジェクトを考えるようになりました。当初は仲間探しのための自身のプレゼンテーションの場を設定するイメージでしたが、その後、若手と協働してつくることをコンセプトとした公演を企画。参加者はオーディションで募集し、実際に上演を行うに至りました（2022年11月下旬実施）。

メンタリングをとおして実際に行動を起こし、若手と呼ばれる人たちと対話をしながら作品をつくったことは、メンティーの今後につながるネットワークが生まれるきっかけになりました。

TOPIC 創作の過程で個人の尊厳をいかに守るか？

舞台芸術業界でも、さまざまなケースのハラスメントが、話題に挙がるが多くなっています。
メンティーからも、過去に参加した作品の稽古中、演出家に言われた言葉が心に残っており、同じことが起こらないよう考えたいといった悩みが寄せられました。
メンターにとっても一緒に考え続ける必要があるトピックで、メンティーとともに話し合うところからアプローチをすることになりました。

Mentee

稽古場などでのハラスメントについては、世代による意識のギャップを感じるケースも見られ、今後どう向き合っていくか悩んでいます。ハラスメントを防ぐための対応については、規約や契約書のようなかたちで進めようとする抵抗感をもたれるようにも感じ、よりよいかたちはあるのでしょうか？

Mentor

どのような対応がよいと思うかを考えるとこからはじめよう

- 👉 一概に正解があるわけではない問題

クリエイションの参加者に、ハラスメントに対する共通の認識をもってもらうために、どのような方法をとるか。メンター同士のディスカッションでも、ケースバイケースの判断が必要になるのでは、という課題が挙がりました。

メンターが過去に関わった事例では、高齢者など世代が大きく離れている人たちとのプロジェクトではガイドラインの提示が有効なケースもありました。一方で、若手が協働するプロジェクトでは、創作現場を快適にするために気をつけたい点や、何かあった際の相談方法などのポリシーを言葉で伝えたケースもあります。

ガイドラインを提示しない場合、意識のギャップが生まれた際には、個別にヒアリングをしたうえで、改善を働きかけることも、いずれもケースバイケースの対応が求められる課題です。

「生活」編

TOPIC 海外への移住とキャリア

バッテリーには海外への移住を考えているメンティーが複数いました。なかでも日頃から人々の生活と芸術が、もっと身近に関わる場をつくっていきたいと考えていたメンティーは、日本には希望が見出せないなか、北欧の公共のあり方に衝撃を受け、北欧を目指したいと思うようになったそうです。仕事と生活、学びのバランス、そして先立つお金をどうするか。具体的な悩みが挙がりました。

Mentee

北欧の芸術と生活のあり方を勉強するために、留学したいと考えています。今は地方の公共施設で責任のある立場で働いており、今後のキャリア形成についても考えたいと思っていますが、北欧にいきなり行っても仕事があるのか、生活はできるのかなど、漠然としていて—。

Mentor

北欧で何を学びたいのか、
学んだ先にどうしたいのか？

👉 問いを深め続けることが重要

ロシアウクライナ情勢をきっかけに、ロシア経由の格安航空券が手配できなくなり、今は北欧へ行くにも片道約30万円。出入国に際しては、新型コロナウイルスの検査の結果によって滞在期間も変わる可能性もあり、メンティーにとっては難しい状況が重なってしまいました。

海外留学経験があるメンターは「インターネットでリーチできる情報は限られている。現地の移民コミュニティにアクセスをすれば、情報がたくさんある」とアドバイス。漠然と考えていても始まらないので、まずは行ってみたいと背中を押され、メンティーも来年の旅行を前向きに計画しています。

仕事と生活のバランスも人それぞれ。芸術に関わる仕事で生計を立てるのか、生計は別の仕事で立てて、ライフワークとして芸術に関わるのか。すぐに答えを出さなくても、これから先のワークライフバランスと海外移住を、少しずつ考えていこうということが確認されました。

TOPIC 生活のなかにアートを

メンタリングとともに、バッテリーのプログラムのもうひとつの柱が公開レクチャーです。公開レクチャーでの気づきをとおして、今後の制作者像に変化が生まれたメンティーもいます。特にNPO法人クリエイティブサポートレッツの久保田翠さんの活動は、障害がある人の居場所をつくることを原点としたアート活動だったため、メンティーにも思考の転換がありました。

Mentee

久保田さんのレクチャーを聞いて、舞台芸術の創作現場においても、生活とのつながりを考えはじめるようになりました。舞台芸術の現場も、育児や介護、ダブルワークなど、さまざまなライフステージの人たちが集まれる場になるためには、どのように環境を整えていったらいいのでしょうか。

Mentor

まずは自分の関わる創作現場から

👉 小さな実験と実践を繰り返そう

舞台芸術界全体を考えようとすると難しいので、まずは自分の関わる創作現場で、視点の持ち方をどう変えていけるかを考えることから始めてみては？ とメンターからアドバイスがありました。

自分のごく身近にいる人たちとのコミュニケーションから、問題意識を共有し、小さな実験と実践を繰り返すことが大切です。小さくても具体的なアクションを起こし、制作者の視点から、主催者や創作環境をつくり出している人たちへとフィードバックをしていくこと。それを繰り返していくことが、舞台芸術界全体の動きにつながると信じてやっいていこうと、メンターからも思いが共有されました。

結婚をして子どもを産んでも、舞台芸術制作という仕事を続けていきたいというメンティーの言葉が印象に残りました。一貫した思いが、メンティー自身の現場に反映されていくのかもしれない。

DISCUSSION ディスカッション

DISCUSSION THEME

ハラスメントにガイドラインは必要か？

メンタリングテーマとしても、話題に挙がったハラスメント。

ここでは「ガイドラインは必要か？」というテーマにフォーカスして、

第二回目の中間報告会で行われたメンティーとメンターのディスカッションの一部をご紹介します。

メンティー1 舞台芸術の現場において、ハラスメントの防止は必須項目になりつつあるトピックです。形骸化させることなく、対策をしていくためにはどうしたらいいか。自分自身も年齢を重ねれば、加害者にならないための視点も必要になってきます。

メンティー2 関わった現場のなかでは、SNS上での発言や、記録写真の公開のしかたなども、ハラスメントとして認識されるべきだと、問題意識が挙がったことがありました。

メンターA 高齢者と作品をつくったときに、高齢者同士でトラブルが起こったケースもありました。そのときには、ある出演者が稽古場で怒号をあげて、別の出演者をののしるようなシーンも経験したことがあります。年齢層が高い人たちが関わる現場では、コミュニケーションのルールをガイドラインのかたちで示す必要性を、切実に感じました。

ハラスメントのガイドラインについては、厚生労働省が提示しているものがありますが、それだけでは不十分なので、クリエイション現場ならではのローカルルールを加えていく必要があると思います。また舞台芸術業界のハラスメントのガイドラインとして、みんなが気兼ねなく使えるテンプレを業界全体でつくっていく必要性も感じています。

メンターB ハラスメントの課題に対しては、組織やグループの関係を、いかにフラットに構築できるかということを考えます。

たとえば劇団の活動は、労働でも雇用でもなく、やりたいから集まっているというケースが多いのではないのでしょうか。そこにお金や労

働の問題が絡んでくると、フラットではなくなってくる。主催者は誰か、ギャラの設定は誰がマネジメントしているのか。そういったなかで、制作者が人間関係までもケアしなければいけないのかという、難しい問題にぶつかってしまいます。

一方で日本では、制作者がカバーしなければならない業務範囲があまりにも広いという課題もあるのではないのでしょうか。たとえば、イギリスのカンパニーのなかには、ケアを担当するスタッフがありました。組織間のコミュニケーションの問題は、制作者やプロデューサーではなく、ケア専門のスタッフが担っているケースです。

もうひとつ別の視点で言うと、ルールをつくって更新することも重要ですが、ルールを定めないでうまくやっていく方向性につくれないのか？ と思ったりもします。福祉の現場に出自をもつアーティストのカンパニーでは、ルールを形骸化するのではなく、問題が起きたときにお互いがケアできる関係性を、創作のベースとしてつくっている事例もあります。

メンターC アート業界のなかで話題になるハラスメントの事例を見ると、「ああいう人だから」と落としどころが決まってしまうケースが多いですね。そういう人たちをつくっている環境が、アート業界だとも言えるかもしれません。

ルールがあることで動けなくなってしまう場合もあるので、大切なのは、第三者がどう介入していくか。風通しのいい組織をどのようにつくっていくか。ルールがあるだけではなく、

それをどう機能させ実践していくかを、考えていく必要性を感じます。

メンティー1 ハラスメントの問題を、ケア担当の件費として予算上でも可視化していくという発想があることが分かりました。個人ができることには限界があるので、仕組みから考えることや、第三者をどのように位置づけていくかなど、バッテリーでの対話をとおして見えてきたことがたくさんあるとあらためて感じています。

ハラスメントのような、ケースバイケースの対応が求められる課題は、事例が集合知になって共有されていくことが、さまざまな現場に必要になりますね。

メンターA 現場によっては、毎年コミュニケーションのトラブルで誰かが泣く、といった事態が繰り返されているケースもあります。クリエイションの現場では、コミュニケーションだけを考えるスタッフも必要で、誰かが傷つくことがないような環境をつくっていく意識をもつことが大切ですね。



EVENT REPORT イベントレポート

メンターとメンティーのチームで行うメンタリングのほかに、プロジェクトメンバー全員で対話をする定期報告会を実施しました。さらに、一般にもひらく公開レクチャーの開催も。各イベントの様子をご紹介します。

REPORT 中間報告会

4/19 TUE 9:30-12:30

中間報告会 第1回

ファーストピッチ以降、メンターとメンティーが集まって対話をする最初の場。メンティーからはこの期間中に取り組んだ活動の内容が報告され、メンターからはメンティーの課題意識や、それに対してフィードバックした知見などを共有しました。制作者としての活動のビジョン、中長期の目標、そのための施策（課題・解決方法・メンターとの関わり方）などがまとめられた「ファーストピッチ用のワークシート」を振り返りながら、今後の動きを確認していきました。



ファーストピッチの様子

8/15 MON 9:30-12:30

中間報告会 第2回

第1回に続き、4カ月ぶりとなる報告会。メンティーからはこの期間中に自身の活動において更新された点や、メンタリングのなかで話し合っている課題や、アドバイスなどが共有されました。前回と異なった点は、ディスカッションの時間が設けられたことです。ディスカッションのテーマは「ハラスメント」「ギャラの設定」の2つ。ふだんのメンタリングでも対話をしてきた問題意識が、メンバー全員でのやり取りによってより多様な視点が交換された、充実した内容になりました。



中間報告会の様子

11/21 MON 9:30-12:30

中間報告会 第3回

4回の公開レクチャーを終えてひらかれた第3回。今回は、各講座のなかで印象に残った言葉を振り返りながら、対話をする場面もありました。メンティーからは期間中に直面した課題も共有され、「メンタリングがなかったらどこに相談できていたろうか？」という問いは、これからのバッテリーや情報共有の方法を考えるきっかけになりました。ディスカッションでは「組織とフリーランス」「他者との関わり方」というテーマについて、具体例をもちよりながら話し合い、ラストピッチにつなげました。



ラストピッチの様子

REPORT ラストピッチ

12/12 MON 13:30-17:15

メンティーとメンターそれぞれが、1年間の活動をふりかえる場として開催されたラストピッチ。ファーストピッチ以降、リアルな場でメンバー全員が会うのも約1年ぶりの機会になりました。当日は、バッテリーの企画趣旨、1年間のタイムラインなどの報告を皮切りに、5人のメンティーが「バッテリーで得たもの」をテーマとしたプレゼンテーション、そして「これからのアートマネージャー」をテーマとしたディスカッションを行いました。

REPORT 公開レクチャー

これからのアートマネージャーの仕事をテーマに、4人の講師による公開レクチャーを実施しました。公開レクチャーは、一般の方々にも広く参加いただけるプログラムとして、バッテリーの活動をひらく機会にもなりました。

5/30 MON
19:30-21:30

第1回「仕事ってなに？ 自分の仕事は、なんだろう？」

講師 西村佳哲(働き方研究者/リビングワールド代表)

「迷ったときには、何度も西村さんの本を開いた」というメンターの植松さんの言葉でスタート。講師が一方向的に話すのではなく、それぞれの参加者がそれを聞いて「どう考えたか」を大事にしている西村さんは、この日も参加者同士の振り返りの対話をはさみながら、レクチャーを展開しました。

「自分の仕事」について考えるとき、「お客さんでいるだけでは済まないこと」を仕事にするのがいいと話す西村さん。ほかの人は気に留めないようなことでも、気になってしまう感覚を大事にすること。世のなかには誰かの仕事であふれていますが、目に見える仕事としての成果は氷山の一角です。外からは見えない広大なそのなかには、「技術・知識」「考え方・価値観」の層があり、そ

の下に態度や行動として表れる「あり方・存在」の層があります。

自分の仕事は、自分以外の誰かに代替可能か、そうではないか？ その人が「いる」感じのする仕事が増えれば、社会は当たり前のように多様で寛容になると、西村さんは指摘します。「仕事」という言葉のなかには、「生業」→「事業」→「産業」といった段階があり、さらにその前段には「はたらき」がある。西村さんは「はたらき」を、たとえば“この人がいると、場がこうなりやすい”といった、生まれつきもっている作用性と定義します。自分の「はたらき」をとらえていくと、仕事が続けやすくなる。その感覚を大切にしていこうと、この日のレクチャーを締めくくりました。



6/27 MON
19:30-21:30

第2回「領域を超えるクリエイティビティー福祉とアートの関係からー」

講師 久保田翠(認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長)

レッツは障害のある人もない人も、多様な価値観を認め合って共生する社会を目指すNPOです。「支援の本質とはどういうことなのか。そこにアートはどのように関わっているのかを、考えていくヒントにしてほしい」とメンターの藤原さんから紹介を受けた久保田さん。レッツを立ち上げたきっかけや思いを共有するところから、講座がスタートしました。

久保田さんの長男・たけしさんは、重度の知的障害をもっています。小さい頃から入れ物にモノを入れて叩く行為を繰り返していましたが、特別支援学校などではそれは「問題行動」と捉えられました。彼にとっては意味があるはずの行動が、どうして問題行動なのか。久保田さんはこのような経験から、たけしさんのような人たちの行動を受け入れる居場所をつくりたいと考え、「たけし文

化センター」を立ち上げたと話します。

「たけし文化センター」では、障害のある人たちが絵を描いたりモノをつくったり、音楽を演奏したりと、好きに過ごせる環境をつくっています。「表現未満、」という活動では、誰かの行為をとるに足りないものと一方的に決めるのではなく、誰もがもつ自分を表す方法としての表現を大切にしています。ここではつくることだけが目的ではありません。水に濡れることが好きな人や、ゆっくり動く人の日常も紹介されました。一般の参加者が障害のある人に出会う「タイムトラベル100時間ツアー」は、参加者の価値観を変えて、将来の進路の考え方に影響を与えるケースもあったそうです。他者の存在を認めるとは、ということなのか。メンティーたちも、立ち止まって考える講座になりました。



9/5 MON
19:30-21:30

第3回「プロセスをつくる「翻訳」の力」

講師 林立騎(翻訳者・演劇研究者/那覇文化芸術劇場なは一と)

自身の軸として「翻訳」を置きながら、さまざまな土地で文化芸術における多様な立場を経験されてきた林さん。そのなかで誕生した作品のお話とともに、創作プロセスにおいて大切にすべきこと、さらには「アートの実用性とは？」というテーマにも踏み込んだレクチャーに。

「アートの実用性」を考えるときに、「最後の成果だけに集中するのではなく、まずは社会のなかにあるさまざまな制度が公共的でないとならない」と、林さんは話します。林さんが言う「公共的」とは、まずは創作プロセスにおいて、誰かが苦しい思いをしつけないような、コミュニケーションの土台をつくること。「この時代にどんな意義のある作品やプロジェクトができるのか」を、プロダ

クションに関わる人たちとともに追求するプロセスをつくることは、アートマネージャーにとって「アートの実用性」を考えることにつながります。

作品やアーティストを支える制度や支援のあり方については、サポートの方法は「お金だけではない」ことが、あらためて確認されました。劇場や美術館はもちろん、助成金制度や人材育成プログラムといった事業も含め、それぞれの制度が「何を保障しているのか」。アーティストやフリーランスの制作者など作品をつくる側と、劇場や行政など制度で働く側、双方向のコミュニケーションによって「実用性」を考えることが大切です。そのためには、創作に携わる人たちがフラットに話し合える場を増やしていこうと、質疑応答に移りました。



11/7 MON
19:30-21:30

第4回「生活と芸術のあいだで—これからのアートマネージャーの仕事」

講師 志賀玲子(舞台芸術プロデューサー/介護福祉士/城崎国際アートセンター館長)

「かなり珍しいキャリアをおもちの方です」とメンターの武田さんから紹介を受けた志賀玲子さん。長らく舞台芸術の仕事に携わったのち、友人の病気をきっかけに、介護をとおした新しいプロジェクトを展開。その後、2021年に城崎国際アートセンター(KIAC)の館長として、再び舞台芸術の現場に戻ってきました。そんな志賀さんならではの視点を学ぶ講座に。

KIACは、国内外のアーティストが滞在して創作する<アーティスト・イン・レジデンス>施設です。「市営施設なのに、なぜ市民でなく外部の人が使うのか」を、市民に理解してもらうことが長年の課題となっています。志賀さんは「アーティストの公募により、評価の定まったものだけでなく、『こんなこともアートなの?』といった幅広い芸術にふれる機会は提供できている。ただ、市民がど

れくらい参加しているかという点では、課題があると思います」と話します。

志賀さんにとって制作の仕事とは、「目の前にある現実の違和感」から始まります。違和感を違和感のまま置き去りにせず、現状を分析し、受け入れざるをえないことと、変えることができることを見極め、状況を変化させること。ALSという寝たきりを余儀なくされる病気を患った友人の、在宅独居生活をコーディネートする仕事もそこから生まれました。舞台芸術の現場から離れた経験が、今の活動の大きな支えになっているという志賀さん。まだまだ芸術は市民生活と距離があることを、あらためて実感しているそうです。志賀さんのキャリアを振り返りながら、ジャンルにとらわれず、「今この時代に自分にはどんな仕事ができるのか」を考える時間になりました。



ROUNDTABLE ラストピッチ座談会

ラストピッチの最後に開催されたメンティーとメンターによる座談会「これからのアートマネージャー」。

1年間の活動をとおして見えてきたのは、さまざまなタイプのアートマネージャー像でした。

このネットワークを今後はどうつなげていくか、これからのバッテリーに向けてもディスカッションを行いました。

座談会の一部をレポートします。

さまざまなアートマネージャー像が見えた1年に

メンターA バッテリーに参加したメンティーの皆さんの活動を見ていると、アートマネージャーと言っても、さまざまなパターンがあるんだなとあらためて感じます。自身がユニットを主宰するアーティストであり、マネジメントも行うメンティーもいましたが、じつはこういったアーティスト側の視点も重要ですね。一方で、制作業務を受託して活動するフリーランス型の制作者、劇団に所属する劇団制作、そして地域やまちづくりなど社会とつながっていくアートマネージャー像も見えてきた。

業界全体としては、劇場やフェスティバルが作品をつくる際に、フリーランスの制作者や制作会社に委託することが前提になっている状況があります。そこでメンティーの皆さんのように活動するフリーランスが一定数いて、そこにバッテリーが取り組んできたような課題が見えてきています。

メンティー1 1年間の活動をとおして、劇団制作として、演出助手のように稽古場につき、作品のクリエイションにじっくり関わりたいと考えるようになったのが大きな変化です。現場が多いと一つの作品に深く関わることができないので、仕事の本数は、今後減らしていきたいです。

メンティー2 私もクリエイションには関わりたいのですが、収入のことを考えると1つにじっくりというのなかなか難しいんですよね。メンティー同士でも「どうしたら食べていけるのか」という話題はよく話しました。

メンティー3 今年は就職のために、新しい地域に移住してきましたが、前の地域でやっていた手法で物事を進めようとしても、うまくいかない。地域で活動するときは、その土地の

文脈のなかで何ができるかを、よそもの視点を活かして考えたいと思っています。

メンティー4 私が住んでいる地域は、人と人の距離感が近いんです。街を歩けばみんな顔見知りというくらい。仕事でも生活でも誰かに付度してしまう感覚があるのですが、都市部の匿名性の高い街の雰囲気新鮮です。バッテリーに参加してみて、メンターの皆さんもメンティー同士も、つかず離れずの距離感で見守っていただけるのが心地よく感じました。

1年間のふりかえり～メンターたちの視点

メンターB バッテリーをやってみると、業界にこの仕組みがないことが考えられないというぐらいの「決定版」だという手ごたえがあります。メンタリングという仕組みが、これからの人材育成のフォーマットとしてあらゆる地域で立ち上がってほしいし、全国に広がってほしいですね。活動をとおして得た気づきとして、今は私たちの世代が、かつてそうなりたくないと思っていた大人のふるまいを、下の世代にやっつけてしまっている現実がありました。変えていかなければならないのは、上の世代ではなく「ここ」なんだということ。これは本当に大きな気づきになりました。

メンターC メンタリングプログラムそのものも、メンターに権力が集中しないように設計することが必要だと感じています。バッテリーがモデルとなって広がってほしいと思うと同時に、使い方を間違えると力をもつ人が生まれてしまう。だからこそ、バッテリーではハラスメントのガイドラインを決め、公募のときにきちんと提示しました。メンタリングは2人1組。定期的に今どんなことが起きているのかを、メンター同士でも共有しながらやってきました。こういった取

組みが公共性の担保になっていったらと。

メンターD バッテリーはメンターとメンティーが「教える・教わる」という関係性ではなく、ともにアートマネージャーとしての関わり合い方を見つめる場所になればいいと考えていました。同じ業界でともに働くものとして、メンタリングは課題をフラットに話し合える時間になりました。

.....
これからのバッテリー

メンティー5 始まった当初は、2カ月や3カ月ではなく、1年間ずっとこのプログラムが続くことにプレッシャーを感じることもありましたが、ただ短期間じゃないからこそ見えてくるものがあって、2～3週間に1回メンタリングをしてもらう仕組みがとてもよかったと思っています。仕事をしていくなかで定期的にメンタリングにかえていくのが、私にとってちょうどいいリズムになりました。

メンティー2 中間報告会でも話題に挙がりましたが、1年間が終わっても、出会ったメンティーの皆さんとのネットワークをどう継続していけるだろうかと考えています。

メンターB 来年度もバッテリーを継続できるよう、いまファンドレイズをがんばっています。今年度のメンティーの皆さんについては「アルムナイ制度」を考えていて。引き続き第1期の皆さんにはパイオニアとして参加いただき、二期のメンバーとも出会っていただけたらと考えています。

メンターE バッテリーを続けていくなかで、参加者の幅をどう広げていくかも課題ですね。今年度の応募者を見ても、大都市からの応募が圧倒的に多かった。今回、地方から参加してくれたメンティーがいたことは、バッテリーにとって大きなことでした。

COLUMN

メンターコラム

ゆるやかな縦と横のつながり

「バッテリー」が誕生したきっかけは、フェスティバル/トーキー時代の同僚であった武田知也さんが、仲間とともに一般社団法人を立ち上げるという話を聞き、徐々に近況報告も兼ねて話そうとなったところから始まります。

まだコロナ禍の落ち着く気配もない2021年の初夏でした。オンラインで徐々に話す中で10年前に現場の最前線に立っていた自分達が、未だに同じことをやっていて、次世代に現場を渡せていないことへの課題感が共通点として浮かび上がりました。そこから「本当に必要な人材育成とは何か」という話になり、コロナ禍でオンラインでの講座は増え、情報に触れる地域格差はむしろ減ったかもしれないが、オンライン講座だと講師が教えたいことしか教えられない、そして現場を通じて新しい人に出会う機会が減ったという点から、このメンターシッププログラムの構想につながります。

第1回目の立ち上げに助成してくださったセゾン文化財団、アーツカウンシル東京には本当に感謝しかありません。

今、無事に第1期の活動を終え、大きな手ごたえを感じています。それを端的に言えば「制作者同士の、安心で安全な縦と横のつながりができた」ということです。事務局も含めれば12人の制作者が1年間様々な現場で活動しています。それらの現場で出てくるいろいろな課題や、情報のアップデート、こんな時に自分だったらどう判断するか、そういった知の共有・交換が絶えずオンライン・オフラインで行われ続けていて、メンティーがメンターから何かを教えてもらうということだけでなく、メンティーの現場を通じてメンターが学ぶことも多くありましたし、そしてメンター同士の情報交換も多々ありました。

このゆるやかな縦と横のつながりを大切に、第2期からは、メンティーのみなさんはアルムナイ(卒業生)として引き続きコミュニティに参加いただき、メンティーのタスキを第2期の参加者につなぎます。こうやって継続していくことで、今はまだ想像もつかない新しい展開がここから生まれていくことを、気が早いですが期待しています。

植松侑子

つくり方が変われば集い方も変わり、 支え方も変わる。逆も然り。

言わずもがな作品創造の一番の源は、アーティスト個人であり、そしてそのことだけを目的に集った劇団やダンスカンパニーであることは、現在も変わりはありません。しかし、そこにお金の問題が関わり、作品が創造される仕組みのグラデーションは変わってきています。1980年代の小劇場ブームから、1990年代の創造型をうたう公立劇場の誕生、2000年代後半からの芸術祭による作品のプロデュース、この間には大小問わない制作会社による「プロデュース公演」—作品ごとにアーティスト・出演者・スタッフが招集され、作品を生み出し、都度解散するという制作スタイルも当たり前になってきました。しかし主催者は、さまざまな要因から自社・自団体に所属するスタッフだけでは、その公演・イベントを実施することができず、制作者も含めて各セクションにおいて「外注」します。この方法の変遷の中で、近年顕著になってきているのが、「フリーランスの制作者」の存在でしょう。特定・あるいは複数のアーティストと協働する制作者から規模の大きいプロデュース公演・イベントの「稽古場づき」や事務局業務、時にはイベントや公演自体のプロデュースやキュレーションまで、彼らは場に応じて姿・役割を変え、この「バッテリー」参加者もそうであるように、プロジェクトのエンジンや目詰まり解消者、媒介者、掃き溜め、、、として、あらゆる役割を担っています。

日本の、舞台芸術業界の作品のつくり方の変遷によって生まれたこの存在を支えることは、作品創造の最前線を支えることに他なりません。これまでこの存在を陰に日向に支えていた人、個人はいました。しかし、この舞台芸術業界の仕組みから生まれた存在を支えることもまた、仕組み化すべきでしょう。この問題意識から生まれた小さな実験が「バッテリー」です。5人のメンティーの相談内容は、そのまま現在の舞台芸術業界の生々しい課題や現場のリアルを映し出していました。そこから目を背けず、議論し、支えあい、それを現場と制度へフィードバックしていく循環から、豊かな作品創造と芸術文化を育む土壌へとつなげていきたいと考えています。

武田知也

SCHEDULE 年間スケジュール

10月

メンティー募集

メンティー募集

20歳～35歳までで、3年以上の舞台制作者としての経験をもち、自身の業務に対する具体的な課題、将来へのビジョン、そして不安をもつ、制作者、アートマネージャーを募集した。

11月

審査(書類・面談) メンティー決定

審査・参加者決定

特定非営利活動法人Explatと一般社団法人ベンチによる審査(一次選考:書類審査/二次選考:面談)によって5名の参加者を決定した。

12月

メンターマッチング

メンターマッチング

参加者1名に対し、2名のメンターをマッチング。

1月 29、30日 ファーストピッチ

ファーストピッチ

東京都内で実施。参加者は共通のガイダンス(ファーストピッチ)にて、活動期間内の自身の活動の具体的な課題やビジョンを参加者およびメンターチームに発表、共有した。以降、メンティーとして活動。メンターチームは担当メンターを中心に、解決のための支援策を検討、策定。

2月

3月

4月 19日 中間報告会

5月 30日 第1回レクチャー

6月 27日 第2回レクチャー

7月

8月 15日 中間報告会

9月 5日 第3回レクチャー

10月

11月 7日 第4回レクチャー
21日 中間報告会

12月 12日 ラストピッチ

メンターシップ 期間

メンターシップ

月1回～2回の定期的なメンタリング、必要に応じた適切な連絡、連携体制のもとで、日々連絡を取り合い、メンターはメンティーの活動のアドバイスなどの支援を行った。また、メンター同士の定例会も実施し、他バッテリーの課題や話題を共有し、議論した。中間報告会では、それぞれの活動報告やテーマをもうけたディスカッションなども行った。さらに、メンティーのニーズに応じ、外部講師を招いたレクチャーを4回実施した。

ラストピッチ

東京都内で実施。期間中、計3回の中間報告会にて活動の進捗と共有を図り、最後にまとめのミーティング(ラストピッチ)を全体で行った。また、公開トークセッションをラストピッチと同日に実施し、参加者とメンターでの公開トークセッションを行い、プログラムの成果を発信するとともに、アートマネージャーのこれからを考える機会とした。

Explat

特定非営利活動法人Explat www.explat.org

2015年設立。特定非営利活動法人Explat(エクスプラット)は舞台芸術制作者を中心とした芸術に関わる専門人材が、自らの仕事に誇りを持ち、心身ともに健康で、生涯の仕事として続けられる労働環境の実現に寄与することを目的とし、専門人材への研修機会の提供、労働環境の整備のための活動・事業を行う。

これらの活動を通じ、芸術を社会とつなぐ専門人材の社会的認知度とその役割の重要性を広く普及啓発することで、芸術活動全体の活性化を図り、文化芸術の進展と社会全体の利益の増進に寄与することを目的とする。求人／求職情報の提供、学生にむけたインターンシップ合同説明会、ファースト・キャリアへ向けた就労スキル訓練のための講座等を実施。

bench

一般社団法人ベンチ bench-p.com

一般社団法人ベンチは、演劇やダンス、アートプロジェクトのプロデュースやコーディネートに関わる舞台芸術制作者を中心に2021年に発足した、アートプロデューサー・コーディネーター・マネージャーのコレクティブ。アーティストと芸術の創造性を膨らませ、芸術と社会をつなげるチームとして、各種芸術文化に関わる事業の企画・プロデュース、コーディネート、マネジメントを担うと共に、現場から生まれる様々なクリエイティビティ、ノウハウ、情報、浮かび上がる課題をチーム内外でシェアし、支え合うことで、アートマネージャーの役割や可能性の拡張を目指す。以って、持続可能で豊かな芸術創造および社会における創造的な時間・空間を創出していく活動を展開していく。

アートマネージャー・メンターシッププログラム「バッテリー」

公式サイト：battery-am.studio.site | Twitter：[@Battery_AM](https://twitter.com/Battery_AM) | Facebook：[BatteryAM](https://www.facebook.com/BatteryAM)

公益財団法人セゾン文化財団 [ARTS COUNCIL TOKYO](http://www.sezonsokai.or.jp)

〈主催〉NPO法人Explat、一般社団法人ベンチ 〈助成〉公益財団法人セゾン文化財団、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 〈「バッテリー」事務局〉NPO法人Explat(橋松侑子+谷種歩)
活動ドキュメント 〈企画・制作〉NPO法人Explat、一般社団法人ベンチ、株式会社ボイズ 〈編集ディレクション・執筆〉及位友美(voids) 〈編集・執筆〉安部見空(voids) 〈デザイン〉内田圭 〈イラストレーション〉ふくしみさと(Folk.)